The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ グリーンランド民話(五編)
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 68, p. 95-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グリーンランド民話（五編）

岡　田　令　子

Five Folktales from Greenland

Reiko OKADA

Greenlandish folktales were introduced for the first time in our journal in 1981 (No. 52, pp. 125－131), for the second time in 1982 (No. 60, pp. 65－83), and this is the continuation of the above series. This contains the Japanese translation and translator's comment on each tale.

11) Brødrene, som forsvandt i en fjord (p. 23)*

12) Iliarsoqqik, den forældreløse (p. 99)*

13) De fnatsyge (p.102)*

14) Qaaterfaarsuk (p. 107)*

15) Om manden, som fik en toppet skallesluger til kone (p. 155)*

*indicates the pages in the original text *ESKIMOISKE EVENTYR OG SAGN*, edited by Ove Bak, Nordiske Landes Bogforlag, 1974.

今回の民話五編の訳は，本学学報（No. 60，1982）に続くものである。

(11) 消えた仲間たち

(12) 孤児（みなしご），イリアルソッキク

(13) ひぜんにかかった息子たち

(14) コテルフォルスク――ある孤児の話

(15) とさかのあるかわあいさを妻にした男の話

(11) 消えた仲間たち

ある入江のそばに一群の男たちが住んでいた。彼らは一人づつカヤックで海へ出ていったが，こんなことが起った。入江の中へ入ったものが一人、また一人と帰って来なくなった。ついに，残ったのは，とても力の強い二人の兄弟だけになった。

その中で兄の方が先ず，消えた仲間たちを探し出すことができるかどうか入江に入ってみることにした。すべての入江を探すために陸に沿って漕いだ。すると流れに抵抗し切れず，彼を陸から離してしまうところへやって来た。彼は陸の，ある地点へと引き寄せられたが，そこには魔法を使って彼をおびき寄せた二人の老人が立っていた。若者が陸へ上ると，一群の男――すなわち，二人の老人の息子たち――がいて，彼のカヤックを取り上げ，それをこわして，積み上げてあるボートの上にのせた。彼が入って行くと，草の実を出してもてなしてくれたが，その実の中には一人の人間の手がバラバラになったのが入っていたので，それは食べ残しておいた。消えた仲間たちを殺したのは，たしかに彼らだった。夜になると，また彼をも殺そうと思っていた。いつもするように，床に一枚の皮を広げて，彼と力くらべをした。だが，誰も彼をまかすことができなかったので，彼には何もしなかった。

カヤックをなくしたので，兄の方は帰って来られなかった。弟の方は待ちぼうけをくったが，ついに兄を探しに出かけた。入江の岸づたいに行き，渦のところへ来ると，同様に老人たちによって引きつけられた。弟が岸に近づくと，男たちがそのカヤックを取り上げる前に，兄は弟を全然知らないように振るまって，カヤックを取ってボートの上に置いた。

兄は他の者たちに，自分がこの男を見張っているから，みんな眠りにつくようにいった。真夜中になって，弟を逃がし，遠くの方へ行ったと思う頃，みんなを起こして，あの見知らぬ男が傷も受けずに逃げてしまったと告げた。男たちは大急ぎでボートを下ろし，オールで漕いで彼を追った。

一番前に坐って，一生懸命漕ぐまねをしていた兄は，つぎつぎとオールを折り，ついに，みんなは，オールなしでは逃亡者に追いつけないとわかった。

幸い逃げ帰った弟は北に南にと助けを求めて，冬には大勢で，入江の奥地に住む男たちを襲うために出かけた。

彼らは，海岸の住人たちが近づいて来るのに気づいた時，兄は他の者たちに，自分が見張りに立つから，その間にみんなは，洞窟に身をかくすようにいった。

攻めて来た者たちが到着するやいなや，兄は彼らのかくれ場を教えた。彼らは入江の奥地の住人を穴の入口から射て，矢がつきたが，例の老人一人を残して，みな殺しにした。すると，一羽の大きな鳥が穴から飛び出したが，弓矢の訓練を受けていたみなし子がまだ一本矢を残していた。その矢で彼らは鳥を射落した。

よくよくしらべてみると，この鳥が人間だったとわかった。みんなはこの鳥をさいて腸を取り出した。彼らはそのあるものを海の一番深いところに沈め，ほかのものは太陽が全く照ることのない場所へ持って上った。

(12) 孤児，イリアルソッキク

大きな家の住人たちの間に一組の夫婦がいたが，小さな息子を残して死んだ。

他の家族が，かわいそうに思って，その男の子を養子にしたが，この子がきたないという理由ですぐいやになった。他の者たちも世話をしたが，同じ理由でしばらくすると見捨てた。この家に住んでいる者がみんなこんな具合だった。一番最後の者達のところでは，割に長い間一緒にいた。しかしある日，夫はアザラシ猟に失敗して腹を立てて帰って来た。それで妻を叱りつけ，この子は何の役にも立たない，この子をごみだめに捨てるようにといった。妻はすてたくなかったが，夫の怒りを恐れて，とうとうごみだめにすてた。しかし，猟をしはじめた息子を一人持っていたやもめが出かけていってこの子を拾った。このやもめがみなし児を育てたので，その日からみなし児は不自由しなかった。

ある年の秋，まだ獲物が沢山たまらない中に，嵐と雪で天候が悪化した。そして日が長くなる前に，もう海は凍りついて天候はずっと荒模様であった。遂にこの家の多くの男たちは全く猟に出なくなった。貯蔵してあった食糧もつきて，夜にはランプも灯されなかった。

ただ，やもめのランプだけは燃えていた。猟に出かけていたのは，ただ一人，彼女のもらい子のイリアルソッキクだけだった。毎朝外へ出ると，一人のカヤックを持たないこの土地の男に出会った。この男が彼の手を取って，一緒に岩山へ走って行き，そこで彼はいろいろなことを習った。

とうとう家のものはみんな寝込んでしまった。やもめは毎晩外へ出ては一握りの肉切れと少しばかりの脂を持って入り，みなの者に分け与えた。自分の息子に四切れやり，もらい子には三切れ，その他の者には半切れと，それに少しづつ脂身をそえてやって，自分は二切れ食べた。

ある朝，イリアルソッキクが外に出てみると，浅瀬に浮いている氷の間から乾いた岩床が見えた。そこへ下りて行くと，二三羽の鴨が飛び廻って鳴き声を立てていた。その鳥を獲ろうと一日中追っかけて，やっと夕方になって，その中の一羽だけつかまえたので，それを持って急いで家に帰った。養母が心配しだしていたところへ，彼が入口の方へすっと入って来る音を聞いた。「わたしの獲ったのは何ですか」といいながら入口のところへ来て自分の鳥をさし出した。寝台の上で横になっていた男たちが，「あ，あの子が鴨を獲って来たぞ」と叫んだ。すると彼らの中でなぐり合いの喧嘩が始まった。「なぜあの子を捨てたんだ。今じゃ，あの子が鴨をもって帰ってくれるのに」と。養母は鳥をばらばらにして，みなの者に分けたが，幾人かの者はもっと欲しいと叫んでいた。

次の日，イリアルソッキクは二羽の鴨を持ち帰り，その日から数がふえてそれがみんなに分配された。この子は再度，あのカヤックを持たない男に出会った。彼はイリアルソッキクを連れて岩山まで走っていき，雪の中にうづくまって嘴をつき出している雷鳥を見せて，どのようにして射獲るかを教えた。

その最初の日，一羽の雷鳥をもって家に帰り，次々とまた数がふえたが，その都度，養母によって分け与えられた。すると男たちはその度に，「あの子を追い出してしまって損をした」といって

いた。

ある日，カヤックを持たない男と一緒に雷鳥獲りに岩山に行くと，はるか海の上に靄がかかって，それが消えたり，現れたりしているのが見えた。カヤックを持たない男が，「こんなふうになると，きっと水の中に獣がいるんだ」といった。そこで二人は高い山に登って目じるしをつけた。家に帰るとイリアルソッキクは義兄に，「明日は猟に出ませんが，氷の上を歩いて，氷の張ってないところを探すだけです」といった。義兄は，「その辺にあるボートの下におれの武器がある。それを取ってこい。それをおまえのために小さくしてやるが，深い雪の下に埋れているから」と答えた。イリアルソッキクはそこへ行き，武器を堀り出し，義兄はそれを使えるように直してやった。

次の朝早く彼は出かけて行った。氷の上を歩いて行くと，陸から少し離れたところに冷えた霧が立つのが見え，氷のさけたところまで来ると，そこでは沢山のアザラシが頭を出したり入れたりしていた。水際に浮いている氷の上に立つのは容易でなかったので，一番小さいのを獲ることにきめた。モリを射ってそれを殺し，氷の上に引っぱり上げて，ひき紐をしっかりかけ，大急ぎでそれを持って帰った。アザラシを持って入口を通ると，今にも飢え死にしそうになっていた男たちが激しく口論しはじめた。だが養母は先ず，一本の毛のような厚さに，皮のついた脂身を切ってみなの者に分け与えた。ある者たちは待ち切れずに，床に四つばいになって手を差し出した。しかし，養母は，「みんなわけ前はもらえるから」といった。そこで彼女は片手ほどの大きさの肉をとって鍋の中で煮，いくつかのランプを灯し，少しづつ肉を分けてやった。それなのに，みんなはもっと欲しいと叫んだが，ある者は，まだ何ももらってないといった。夜になると寝台から床に這い出して肉をぬすもうとしたが，力がないので寝台まで戻れず床の上に横になったままだった。

次の日に彼はもっと大きいアザラシを持ち帰り，養母はランプをみんなつけたが，用心して，ほんの小さな切れと脂のついた薄い皮を毛二本ほどの厚さに切って分けてやった。

一度は，ずっと沖の氷の上で二匹のアザラシを獲って，引っぱって帰りかけた時，急に吹雪に会い何も見えなくなってしまった。風に逆らって進んでいたが，何時か南風に変っていたので方角を間違えてしまった。

とうとう夕方になって，薄暗がりの中で氷が浮いていたのを見て，海岸にいることに気がついた。陸に上って，獲って来たアザラシを置いたまま一軒の家までたどりついた。彼は入口の方へ入って行った。入口のところまで来ると，一番前のランプが見え，その後に一人のやもめが一人の若者と坐っていたが，若者は毛皮の衿にあごをうずめていた。家の中の後の方のランプはみんな消えていた。イリアルソッキクは，「訪ねて来たのではないのですが，風向きが変ったので，雪の中で道に迷ってしまったんです」といった。イリアルソッキクは，「わたしの持っているアザラシの一匹が欲しいなら，さし上げましょう」とつけ加えた。この言葉が終るか終らないうちに，奥の暗がりの中からうめくような声が聞こえて来た。ここにも，すなわち飢え死に一歩手前の人々がいたのだった。そして彼がちょうどいい時に来あわせた。

次の日は晴天だった。彼は再び家に帰った。そこで養母に，どのようにして餓死しそうな人々を

助けてやったかを話すと，母は，「いつもそのようにしてあげるが良い。そうすれば，返礼としてお前の獲物は増えることだろう」といった。

またある時，氷の上で何か獲物を取って，引きずって帰ろうとしていた矢先，風の荒れ狂うような音が聞こえ，同時に氷がメリメリと音を立てた。あたりを見廻しても何も変ったことはなく，ただ氷山があるだけだったので，氷が割れたのかと思っていた。すると再び，風の荒れ狂うような音が近づいて来た。ふとふり返ってみると，氷山だと思っていたのが，一匹の巨大な，氷に包まれた老いた熊で，それが彼の前に立ちはだかった。この熊につけられたので，大きな氷山の上に逃げ，ずっと追いかけられながらその上をぐるぐる廻って，ある定まった地点へ来ると氷の壁に穴をあけて走ったが，とうとう洞窟が出来上り，それが大きかったので，その中に跳び込んだが，熊の方は，彼の足跡をかぎながらまだ走りつづけていた。熊が穴の前を通る度に，彼はピッケルを投げ続けていると，熊の体についていた雪がだんだん落とされて，とうとう毛が出て来た。血が出はじめ，熊はますますいきり立って鼻息を荒立てながらぐるぐる廻り続けた。しかし，だんだんゆっくりになり，じっと立ち止ったかと思うとばったり倒れた。それで熊のところへ行ってみると死んでいた。イリアルソッキクは，その体から少しだけ肉を切り取って家路についた。

家に帰って，熊のいたあたりの様子を話したので，熊の肉を欲しい者は誰でも取りに行くことができた。

翌日家の仲間たちと熊の皮をはぐために出かけた。少し行って，行く手の氷の上に何か黒い点が見えたので近づいて見ると，それは一人の死人だった。もう少し行くと，また一人が横たわり，また，その先にも一人といった風だった。数人の者は熊までたどりついて，少しばかりの肉にありつけたが，その場で倒れて死んでしまった。他の者は家へ帰る途中で死んだのだった。

(13) ひぜんにかかった息子たち

ある老人に二人の息子があったが，カヤックを与えてはやれなかった。

だが息子たちは，けっこう陸での猟に特異な能力を発揮していたので，隣近所の者たちが羨ましがっていた。同じ家に住む老婆がその二人に魔法をかけ，二人はひぜん（疥癬ともいう）にかかり，なすすべもなかった。

心配して父は奥地に入り，湖までやって来て，一羽のあびに出会ったが，その鳥は，彼が自分たちの卵を取りに来たのだと思った。彼が，息子たちを治す方法を探しに来たのだと告げると，あびは二度水の中にもぐった。二度目に，小さな鮭を持って上り，息子たちにその鮭の肝を塗りつけ，すっかり塗って残りがなくなればその肉を食べさせるがよいといった。

その通りにすると，二人の息子は治った。そこで父は‘コーサックス’のように，二人の息子たちに，念力の男――人間の顔をした狐ほどの動物――を念じさせて，息子たちに力を与えてやった。二人は大変長生きをし，彼らに太刀打ちできる敵は一人もいなかった。

⑭ コテルフォルスク――ある孤児の話――

コテルフォルスクは，かわいそうな孤児だった。誰も世話をやいてくれる人がいないので，この子は成長するにつれて，どんな風にして一人前になったらよいのかわからなかった。

コテルフォルスクは，カヤックを漕ぐのをとても習いたかったが，誰もカヤックが持てるようには助けてやらなかった。ついに，自分一人でカヤックをつくろうと決心はしたのだが，誰もナイフを貸してくれなかったので，コテルフォルスクは，先ず，石を使い，次に貝がらを使うことにした。

近所に心の良くない男がいて，この孤児に，良くない方法で関心をもった。白熊の毛皮をすっぽりとかぶって，足音をしのばせ，このかわいそうな子の後に行き，「ウウー」といって熊のまねをしようとした。コテルフォルスクはふとふり返り，おそろしかったので仕事をほうり出し，道具を捨てて一目散に逃げた。

他の者たちが，外へ見に出た時には，彼が貝がらでつくった道具に今度は同情をよせた。そのうちにあのコテルフォルスクをおどした男が進み出て，彼にいった。

「一人でカヤックがつくれると思っているお前は馬鹿だから，別の意味で同情したよ。だから熊の毛皮をかぶって，おどしてやったのさ。」

これを聞いて，居合わせたみなのものは，大声をあげてこのかわいそうな子のことを笑った。この子は心の中では非常に無念だった。

大きくなるにつれて，彼は復しゅうのことだけを考えた。先ず，淋しいところへ行って，魔法を使うことを一生懸命にならった。同時にカヤックをつくってその練習もしたので，もう獲物をとることもできた。

ある日，小さな島の上から，一匹のセイウチが海面に顔を出しているのを見つけた時には，

「ただ，その皮をぬがすことができさえしたら……」と思った。そこで，魔法の歌をうたい出した。しかし，効き目はあらわれなかった。

不満足のまゝ彼は家へ帰ったが，かたき討のことをいつも考えていたから，皮をぬがせる歌を習うことに心を打ち込んだ。そして，その歌を兎に歌ってみた。その効き目があったので，いよいよかたき討の覚悟はきまった。

ある日，みんなが外へ出てしまったので，カヤックに乗って，ちよっと人気のないところへ出た。そこで岩に上って海面を眺めていると，一群のセイウチが遊んでいた。彼はその中の一匹に歌を歌いはじめると，それが岸にやって来て，彼の下でとまり，とうとう皮がすっぽりとぬげてしまった。その後で，その皮をまとって上ったり下りたり泳ぐ練習をし，カヤックに出会っても，体をこわばらせると，モリが入り込まなくなるということがわかった。

あの心の良くない男は，そのうちにだんだん年をとって，よぼよぼになってしまった。もう猟を

することもやめてしまい，魚だけをとっていた。ある日コテルフォルスクは，セイウチの皮を着て，老人が魚をとっている，まん前へ現れた。すると老人は，

「あっ，あっ！わしが若ければ，何とも大きなえ物がとれるのになあ！」と叫んだ。それから家へ帰って，もう何年も使わなかった武器をさがし出して，また，魚をとっていたところへひき返した。

「おお，また立派なセイウチがいるぞ」といって，すぐカヤックに乗ってセイウチのところに漕いでいった。セイウチに対面して，モリを放した時，コテルフォルスクは体を堅くし，モリをつかんで受け止め，浮き袋と一緒に水の中へ引っぱって，そのつめを取って空気を抜いた。それから急いで陸に上がり，またカヤックで家に帰った。老人は空気袋をなくしたのをくやしがり，家に戻ると，「また猟を始めたよ。この間はその第一のえものがいた。セイウチだったが，浮き袋ともども取り逃がしてしまった」といった。

コテルフォルスクはこれを聞いたのだが，老人にしゃべらせておいた。夕方，胸の肉をごちそうするために男たちをみんな招待した。するとあの老人もやって来た。食べ終って，みんなで楽しく話していると，また，あの老人は，取り逃がした獲物を残念がった。みんなが集って来る前に，コテルフォルスクは，壁に皮ひものついた空気袋を掛けておいた。それで老人がこの話をしだすと，「ほら，あそこにおまえさんの道具がかかってるよ」といった。「帰りに持ってお帰り。」すると老人の顔には失望の色がうかび，今にも泣きそうになって，大恥をかいて逃げていった。

白熊の毛皮をつけてからかった男に，この孤児の少年は，セイウチの皮をつけて，かたき討ちの念願を果たしたということになる。

(15) **とさかのあるかわあいさ**を妻にした男の話

一人の老人が，いつも，まるで自分の子供のようにアザラシの頭と遊んでいた。海へ出かける時にはアザラシの頭を海岸に置いて，カヤックに乗ると頭に向って，「さあ，上って行けるかな」といった。また家に帰ると，「出かける時にわしがいったことを，おまえたちは聞きたくなかったようだな。水のところへ来てはいけないといわなかったかな」といった。そして水の中に頭を一つ投げ込んで，「ほら，見てみろ，おまえたちの一番下の弟が水に落ちたぞ」ともいった。

ある日，彼はまた，非常に淋しくなったので，あてもなく奥地へぶらぶら歩いていった。すると，湖のところで水浴びをしている大勢の女たちを見た。それで欲望が目覚めた。気がつかないように，そっと彼女たちの着物のところへ行き，一番美しいと思うのをかくした。それから，わざわざそのことを知らせた。女たちは彼を見ると水から急いで上って着物を着て，鳥の姿になって飛び去ってしまった。着物を取られた女だけが取り残された。老人は彼女のところへ行って，「わたしの妻になってくれるか」と尋ねた。「なりましょう。でも着物は返して下さい」と女は答えた。そこで彼は着物を返したが，飛び去ってしまわないように，しっかりと彼女をつかまえた。

次の日，彼女が逃げないか心配で，カヤックで猟に出かけることができず，とうとう猟に出るのをすっかりやめてしまった。ある日，彼女はいった―「出かけても大丈夫ですよ。今はあなたを愛していますから。」それで彼はまた，アザラシの猟に出た。ついに妻は男の子を生み，この子が大きくなるとまた男の子を一人生んだ。しかし，それ以上，子供はできなかった。

子供たちが少し大きくなると母親は子供たちを連れて出た。道すがら彼女は子供たちにいった。「お前たちは鳥の親類なんだから羽を集めるんだよ。」そんな風にしてある日，彼女は羽の翼を一人の男の子につけた。すると突然，その子がとさかのついたかわあいさに変って，飛び去った。同じことをもう一人の子供にしてやり，自分も翼をつけると，とさかのついたかわあいさになって飛び去った。

老人が家に帰ってみると，妻も子供たちもいなかった。彼は悲しくなってカヤックに乗ったが猟には出なかった。ある日，砂丘のあたりを歩き，カヤックをおいて砂丘を越えて奥地に入り，大きな湖までやって来た。あたりを見まわすと，彼に背を向けて木を割っている男が一人目にとまった。その男の方へ歩いて行くと，下の方が震えているのがわかった。その男は，「お前はどちら側からやって来たのだ」といった。老人は「前からだ」と答えた。男は，「もし後から来ていたら，お前を殺していたぞ」といった。老人は，「三人の者を見かけたかどうか教えてくれるなら，わしの新しいカヤックをやろう」といった。男は，「お前のカヤックは嫌いだ，三人は見かけなかった」と答えた。老人は更に，「わしの新しいボートをやるよ。だが，三人の者を見かけなかったのか」といった。「お前のボートは嫌いだし，三人は見かけなかった。」老人はまた，「お前は木を割っているから，わしの新しい斧をやるよ。三人を見かけなかったか」といった。「うん，この斧はすりへってしまった。あそこの小川にいる鮭のしっぽに乗るがよい。しかし，子供の叫び声がきこえても目を開けてはならないぞ。」

そこで老人は鮭のしっぽにまたがって目を閉じた。サッという音が聞こえたので少し目を開けると，すさまじい流れが彼を運んでいた。それでまた，目を閉じてじっとしていた。すると，「うああ，お父さんが来たよ」といっている子供たちの叫び声が聞こえた。「お前たちのお父さんが来られないようにしておいたのに」と，母親が返事をしているのが聞こえた。子供たちは「お父さんが来たよ！」といいつづけていた。それから老人が陸に上がったところに，５つの窓のある家が一軒見えた。家の中に入ると，沢山の女に出会った。一番遠くの壁のそばに彼の妻が坐り，すぐ前にしし鼻の男がいて，「結婚しておくれ」とだけいっていた。ところが妻は，「しないよ。私には主人がいるんだから」と答えていた。そこで他の者はみんな外へ出て，この二人だけが残った。それからしし鼻の男が外へ出た。

今にも老人が妻を自分のものにしようとした時，彼女も急いで外に出た。それで彼が後からついて行こうとすると，彼女はまた，とさかのあるかわあいさに変ってしまった。

女たちはみんな，かわあいさに姿を変え，しし鼻の男が今度は‘angeltaske’（？鳥）になった。老人がふり返ると，家はかもめ塚になってしまった。

訳者解説

(11) 消えた仲間たち

先ず，内陸に住むエスキモーと海岸に住むエスキモーたちの仲の良くない様子が伺える。内陸のエスキモーは海岸からの者を次々と殺してしまう。潮の流れなどの関係で渦巻きができており，そこに近づくとカヤックもろとも人々は沈んでいったのであろう。しかし，この物語では，魔力を駆使できる老人が引きつけたということになっている。殺されず後に残ったのは力持ちの兄と弟ということでこの二人の勇敢で気転のきく利口さから遂に勝利をかちとり，敵をみな殺しにするという勇ましい物語ができ上っている。その中には，例の老人が姿を変えて鳥になって飛び上るが，射落されてしまうという，自然界と人間界とが自由に姿を変えることができる不思議な力があるようにえがかれている。これは人間と自然界の未だに分離し難い融合といった，ものの考え方なのか，それとも，二者は混沌として交っているのか，多分，エスキモーの心の中では後者であろうと思われる。

恐ろしい描写の部分は，出された草の実の中に，人間の肉切が入っていたことだが，昼間は，相撲など取って友交的にふるまっているが，実は相手の力がどれ程かを見て，夜には殺してしまおうとの意図なのである。昼の姿と夜の姿の変化には，われわれの心の姿を，多少の誇張をもってではあるが，映し出しているように思える。

また，最後の敵を討つという重要な時点で矢がつきたかのように思われた時，みなし児が，ある種の幸運をもっていて，彼の矢が用いられ，それで問題の悪の霊を持つ老人が射殺されるところにも，注目すべきである。みなし児に関する物語はもっと大きく，(12)と(14)で取り上げられ，彼らのもつ幸運といおうか，他の者には与えられていない運の強さなどをそなえているところは興味をひく。さて，老人が姿を変えていた鳥を殺した後，人々は，にくしみのあまりであろう，鳥を引きさく。その肝を捨てる場所が何かを意味しているとも考えられる。その前に肝という語から受ける意味であるが，肝とは内臓全体をも指すことがあるが，単に肝臓という風にとってもよい。肝は，内臓中でも大切な部分とされ，精神の宿るところ，心そのものといったものに解釈されるような表現が日本語にも多い。その肝を，海の最も深いところ，——無意識の最も深いところ——と，陸上にあっても太陽の全然あたらないところ—暗黒—の中に置くところは，エスキモーの肝というものに対する考え方を象徴的に表現しているとみてよいのではないだろうか。すなわち，水は生命の根元，暗黒は心の中の無意識の部分とみる時，（悪魔の）肝の帰着すべき場所へ戻されたと考えられるかも知れない。

(12) 孤児，イリアルソッキク

この物語は(11)と異って何も魔法の力の介入していない世界を描いている。厳しい天候が続き，猟に出られなくなり，食糧難を来して飢餓にさらされ，食物をみると，空腹を満たそうとうめく人々の生活は，グリーンランドでは，しばしば起るリアルな出来事なのであろう。しかし，獲って来られた食物は，この物語でもみられるように，みんなで分け合うという習慣を持っている。貯蔵庫の食糧はだんだん減り，やもめは用心して，ほんの少しづつを人々に分ける。その様子を髪の毛一本ほどとか，二本ほどといった表現を用いているところはおもしろい。

さて，食糧を確保するにあたって，男たちはみんな，悪天候を理由に海に出なくなるというのに，ただ一人，一番不幸と思われる，親をはやくになくした，みなし児が活躍するところも，ちょっと考えさせられる。現実に，エスキモーの社会では衛生観念などほとんどなく，きたないのは当然であったであろう。そのうえ，不衛生な生活条件を強いられて，人々は若くして死んで行ったであろう。その時，当然後には，乳飲み子などが残される。しかし，誰かがその子を育てるというのもごく自然なことだが，この物語に語られているように，きたなくて誰にも好かれなかった幼児が，やもめに拾われ，成人してからは，他の子供より，すぐれた働きをし，やもめを助け，その息子を助け，他の男たちに食物をもって帰ることができたというのはどういうことなのであろうか。あちこちの人々の世話を受け，あまり大事にされなかった子が遂に一人のやもめに拾われる。それからこのやもめに育てられるという経過をたどるが，この間ずっとこの子が他の，親のある子にも増して，生命力のある子供であったのだろう。母がなくても，その代りをしてくれるやもめがおり，父がいなくても父の代りをして色々猟の仕方を伝授してくれる男性がいて，このみなし児は充分，強い賢明な若者に成長してゆく。はじめは小さなものから次々と立派なものを殺して持ち帰る様は(10)の「置き去りにされた女とその養女」でも同じである。先にも述べたように，エスキモーの社会では女性，こゝではやもめがそれを調理して分配する役目である。みなし児がアザラシを獲りに行って，道に迷い，ふと一軒家に近づくが，そこでも人々は飢えている。「食物」を耳にする時，飢えた人々の反応は非常にはっきりと，手に取るように描かれている。そして帰宅した時，人助けをすれば，ますます獲物が増えるよ，といわれるところなど，彼らのものの考え方，あるいは海の神への信仰といったものを間接にではあるが見せられるようである（cf. (4)「岩の精の助け」）。

話がみなし児からそれたが，幼くして両親を失うという悲惨な運命に会いながら，強い独立心を育て，心身の訓練にはげむ子供に対して，人々は称賛し，同時に自分たちのおろかさに気づきお互にいさかいを起こすまでになる。しかし，飢えた人たちは，つきつめたところ，ただ，もっともっと食べ物がほしいという欲望だけが残るに違いない。物語の中で，熊に出会い，如何にそれを殺してしまうかというあたりは，まるでチャップリンの映画を見ているように愉快であるが，その肉をいざ食べたければ食べよといったところで，そこまで行きつけないもの，行ってから帰れないものなど，救われないほどおなかのすいた人達の有様を読む時，エスキモーたちの氷の中での生活の厳

しさがひしひしと感じられるのである。

(13) ひぜんにかかった息子たち

前の物語でも読みとられたように，大へん非衛生的な生活を強いられたエスキモーの間では，病気も多かったことであろう。皮膚病など，しょっ中あちこちに起っていたと思われる。

この物語では，そのような衛生状態の下で，二人の息子がひぜんにかかる。しかし，彼らにとっては，これは衛生状態が悪いのではなく，すぐれた猟師である息子たちへの人々のねたみによって，ある老婆が魔法をかけたからなのである。ここでも，彼らの間におこる食物の問題が如何に重要かがわかると同時に，他より多く獲っても，ねたみを受けることになる。彼らの心理的なリアクションがすぐに‘魔法をかけられた’という風に理解されていることもわかる。

それに対して，父親の愛が語られる。息子を救いたい一念，父は旅に出て，何か良い方法はないものか探し求める。ついに彼は鳥の助けを得て子供のひふ病を癒すことになるが，ここでも，鮭の肝が用いられる。(11)の物語では肝を捨てた場所に目をつけ，その意味について述べたが，ここでは，直接にこの肝を皮膚にぬりつけることで病気がなおるのであるから，肝の効き目はてき面である。人間が動物やその他自然の生き物——草木や花などでも——の助けによって因難な状況を切り抜けるテーマは多くの国の民話にみられるものである。そしてまた，人間自身も内なる力——念力といったもの——を集中させることによって，なお一そう，今までよりも強い魂の持主になれることを疑わないエスキモーの心を読み取ることができる民話である。

(14) コテルフォルスク——ある孤児の話——

グリーンランドにおいて，カヤックを持つことは，男としてのアイデンティティーを獲得するようなものであろう。親から子へと受けつがれる様々な生活条件を満たす技術も重要なものであろう。そのいずれをも可能にしてもらえないのがみなし児の置かれた状況であろう。結局，自分の親のないものは，生活してゆくのに非常な苦労をなめさせられる。

この物語の中の男の子も，カヤックを自分でつくり，道具も自分で考えた末，切れ味の悪い石や貝をつかわなければならない。にもかかわらず，この子に恥をかかせ，からかおうとする者が出て来る。他の者もこの子の道具を笑う。群衆心理とはこういったものなのかも知れない。きっと，今にみておれ，とこの子は心に復讐を誓う。それからは，また魔法の力が入り込んで来る。執念と魔力をもって，あだ討は成功する。みなし児の涙ぐましい努力の有様は，どこまでもグリーンランドという背景と習慣を浮き彫にしてくれる。魔法の歌をはじめ兎に試して失敗，だんだん上手になっ

て，ついにセイウチの皮を抜がせることができるまでになるというところなど少しほほえましい感情の方が先に立つが，少年の魔法を習う努力はすごい精神力を集中して，はじめて出来えたことを述べているのであろう。ここに出て来る老人のふるまいは，この少年の緊張とはうらはらに，人間のいやな部分をみせている。それは怠けであり，あざけりであり，空虚な昔への自慢であり，現実の自己を見つめることのできない，なさけない性格である。それに反して，一途目的達成のために励む若者のキリッとした姿は尊敬の念をおこさせる。

熊やセイウチといった寒い地方に住む動物たちが登場して，この物語に強い地方色を出している。

(15) とさかのあるかわあいさを妻にした男の話

人気の少いあるところに老人が一人住んでいたと想像しよう。来る日も来る日も彼には話しかける人もなく，孤独である。アザラシの頭を玩具に遊ぶというところなど気が狂いそうに淋しい人間のおかれた状況ではないだろうか。その時，この老人は湖のほとりをとぼとぼと歩いてゆく。他の人間，女性を求める彼の心に映ったのは一群の水浴びをする鳥，しかし，それはもはや鳥ではなく美しい乙女の群として彼の目に写ったのであった。人間の男が鳥とか獣とかの変身した女性を妻にするというモチーフは多分多くの国の民話とも共通したものであろう。そこにはわれわれの意識が無意識と平和なバランスを保ちえた状況を象徴的に描いているとも考えられるが，無意識を長い間に亘ってつかまえておくことは無理であり，いつかはこの‘無意識’は‘意識’からすべり出してつかまえられないものになっている。それが物語では，結婚した相手の女性が元の姿になって逃げて行くといった形をとるのであろう。実際ここでは，とさかのあるかわあいさとなって飛び去るのである。

逃げていった鳥，すなわち妻に，この老人は強い未練を残し，その後をどこまでも追って行くところなどは，われわれに親しまれている「夕鶴」や「羽衣」，あるいは「かぐや姫」などと異った情緒的雰囲気をかもし出してくる。

以上，グリーンランドのエスキモー達の間に伝わる，いくつかの民話を通して，彼らの置かれた厳しい自然状況と，生存を保持して行くために必要な毎日の獲猟の営みや，彼らの素朴なイマジネーションの世界を見ることができたが，その中には世界の他の地方にも見られる共通したテーマを題材にしたものもあり，われわれに絶えざる興味と人間としての共感を起こさせるのである。